様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　5 月　29 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５３０５９０
研究課題名（和文）ポスト戦後期の日本社会におけるアメリカナイゼーションの文化史研究
研究課題名（英文）Cultural History of the Americanization in Japanese Society of the Post-postwar Era
研究代表者
難波　功士（NAMBA KOJI）
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：20288997

研究成果の概要（和文）：占領期から 1950 年代にかけてのアメリカへの強い憧れ、60 年代のアメリカへの反発を経て、70 年代以降は、アメリカのライフスタイルやテイストが、日本の若者たちに適宜取り入れられていく段階に至る。そして 90 年代には、国内外の若者文化が同時進行し、融合していく傾向も一部には生じていた。しかし 2000 年代に入ると、経済上のグローバリゼーションが加速する一方で、若者たちの海外への文化的志向は急速に弱まっていく。
研究成果の概要（英文）：During the occupied era and in the 1950s, Japanese young people had an intense longing for American culture. In the 1960s, the tide of anti-American was rising in Japan. In the 1970s and 1980s, Japanese young people appropriately adapted American lifestyle and taste to their way of life. In the 1990s, youth cultures simultaneously developed all over the world. Occasionally, youth cultures in Japan are directly connected with global youth cultures. However, in the 2000s, although the globalization of the economy was accelerated, aspiration for foreign youth cultures go weakened rapidly in Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学、社会学
キーワード：グローバリゼーション

１．研究開始当初の背景

戦後日本社会におけるさまざまな若者文化の生成・流行・衰退の過程を描いた、本研究課題研究代表者の著書『族の系譜学：ユース・サブカルチャーズの戦後史』（青弓

社刊、2007 年）は、これまで「～族」などとして取り沙汰されてきた若者文化を、通時的・体系的に記述・分析する試みであった。また日本マス・コミュニケーション学会誌に掲載された研究代表者の論文「メディアとサブカルチャー」（『マス・コミュニケーション研究』70 号、2007 年）は、若者文化研究におけるメディア史的・メディア論的な視点の重要性を指摘したものであった。だが、それらの著作において言及された対象は、基本的には日本独自の事象に限られており、海外の若者文化の日本への伝播・受容の問題にまで、じゅうぶんに展開されてはいなかった。

先行研究全般を見渡しても、海外における日本産のコンテンツの浸透など、いわゆる「クールジャパン」と呼ばれるような日本の大衆文化のグローバリゼーションに関する研究・調査は、国内外の研究者によってインテンシィヴに進められている一方、日本社会における海外の大衆文化・若者文化の受容と、そこでの独自の展開と変容に関しては、じゅうぶんに研究がなされてきたとは言い難かった。

２．研究の目的

本研究は、日本における若者文化のグローバル化（globalization）とローカル化(localization)に関して、いまだ実証研究の蓄積が少ない点に鑑み、その空隙を埋めようとするものである。中でも、文化のアメリカナイゼーションの問題を中心的に取り上げ、以下のような仮説を、より精緻に論証していくことを目的とする。

《終戦後、海外（特にアメリカ）の文化を渇仰した時代を経て、1970 年代から 1980 年代にかけて海外のコンテンツを選好する時代へと転じ、1990 年代は海外の文化的なムーヴメントと直結しようとする志向をもつ、「海外と呼応するディケード」となる可能性も存在したが、2000 年代以降は、海外出自の、もしくはそこにさまざまなアレンジが施されたコンテンツないしプロダクツが日本社会に遍在した結果、あえて海外へと意識を向ける度合いの低下した「海外が閾下する時代」へと立ち至っている。》

また、これまで文化の受容・伝播は、主として空間軸によって語られてきた。しかし、時代によって受容のあり方は当然異なるし、それぞれの社会において受容された文化が、時間的な経過とともに独自な展開・変容を見せることも多々ある。本研究は、空間軸と時間軸との交錯の中で、戦後日本社会における若者文化のあり方、特にそのグローバル化とローカル化という二つのヴェクトルの干渉・輻輳の変遷を、歴史社会学の手法をもとにクロノロジカルに問い直す試みであり、若者文化のグローバリゼーションの諸相について精緻かつ包括的な把握を目ざすものである。

３．研究の方法

まず文化のグローバル化とローカル化に関する国内外の研究動向や理論的な展開をサーヴェイし、その先行研究のレヴューをもとに、日本の戦後若者文化に関する調査・研究を進めていく。具体的には、国会図書館や大宅壮一文庫などを利用し、資料（雑誌などの文献、映像、音源など）の調査・収集・分析を続け、適宜その成果を論考にまとめていき、最終的にはそれらの論考を編集した単著書として刊行することをめざす。

４．研究成果

徐々に対象とする年代を現在へと近づけつつ、鋭意、資料収集・分析を行ってきた。たとえば研究代表者は、アメリカ軍基地の存在が、戦後の日本文化に与えた影響に関する論考「基地という視座」を執筆し、同論考を掲載する編著書（難波功士編『叢書戦争が生みだす社会３：基地文化』新曜社刊、近刊予定）のための編集作業を継続して行ってきた

（以下、成果はいずれも研究代表者個人によるもの）。

2010 年度には 1950 年代以降のアメリカ文化が日本の若者ファッションに与えた影響について、日本生活学会第 37 回研究発表大会（2010 年 5 月 8 日、於：武庫川女子大学）にて発表を行った。同報告の内容は、『生活学論叢』17 号（日本生活学会、2010 年 9 月）に採録されている。他にも同テーマに関しては、市民向けの公開講座ではあるが、「『装い』と現代社会：若者文化が映す世相」（2011 年 1 月 29 日、於：パルテノン多摩）として講じており、その講演録を出版する企画も進行している。

そして、アメリカの影響を強く受けて始まった日本のテレビ CM に関しては、共編著書『テレビ・コマーシャルの考古学：昭和 30 年代のメディアと文化』（世界思想社刊、2010 年 7 月）における「あの時君は若かった？：昭和三〇年代 CM に見る若者像」および「放送史の余白から」の章で論じている。また同内容は、「日本のテレビ・コマーシャルの変遷：1955～65 年を中心に」（香港大学現代言語文化研究所主催“Inventing Commercial Culture in East Asia: A historical study on Advertising”、2010 年 12 月 12 日、於：香港大学）として、国際シンポジウムの場にて研究報告を行っている。広告表現のグローバル化とローカル化の問題は、「「ビジネスモデル」としての広告系文化人」（南後由和・加島卓編『文化人とは何か？』所収、東京書籍刊、2010 年 10 月、pp.306-323）においても一部言及している。また、本研究の理論的・方法論的な背景や学説史的意義に関しては、論文「なぜ「メディア文化研究」なのか」（『マス・コミュニケーション研究』78 号、2011 年 1 月）の中でもふれている。

2011年度内に刊行した単著書である『メディア論』（人文書院刊、2011年8月）・『人はなぜ〈上京〉するのか』（2012年1月、日本経済新聞出版刊）や、共著書である藤田真文編『メディアの卒論：テーマ・方法・実際』（ミネルヴァ書房刊、2011年7月、「メディア史：雑誌をめぐって」を分担執筆）・小谷敏ほか編『若者の現在２文化』（日本図書センター刊、2012年3月、「関西発文化について」を分担執筆）などにも、一部本研究の成果が反映されている。また、「遠藤知巳編『フラット・カルチャー』」（『社会学評論』62巻2号、2011年9月）といった書評、「文化の扉：はじめてのアロハ」（2011年7月25日付朝日新聞）といった取材対応、「『ヤンキー進化論』我々に見えていない生活者がいる。」（博報堂生活総合研究所主催「生活者発想祭」、2011年9月27日、於：博報堂生活総合研究所）といった講演活動なども、本研究の成果を一部踏まえたものである。

また、2012 年度に発表された単著書『社会学ウシジマくん』（人文書院刊、2013 年 2 月）、論文「「上京」と若者」（『月刊福祉』95 巻 13 号、2012 年 12 月）、評論「私にとっての「ヤンキー」」（『熱風』10 巻 11 号、2012 年 11 月）、書評「佐山一郎『VAN から遠く離れて』」（2012 年 5 月 13 日付日本経済新聞）・「デイヴィッド・M・スコット＆ブライアン・ハリガン『グレイトフル・デッドにマーケティングを学ぶ』」（『ポピュラー音楽研究』16 号、2013 年 2 月）なども本研究活動を一部踏まえてのものである。一般への成果の還元として、「ヤンキーは消えた？」（2013 年 1 月 15 日付西日本新聞）・「ディズニーの世界」（2013 年 4 月 3 日付朝日新聞）など、新聞・雑誌・放送などへの取材対応も行った。

戦後日本社会における各種の文化的表象を研究分析していくための方法論的・理論的な検討としては、単著論文「社会表象としてのポスター」（『美術フォーラム 21』26 号、近刊予定）を 2012 年度内に脱稿済であり、当該論文を総論ないし序章部分に組み替えた上で、これまでの本研究成果を歴史的記述としてまとめあげ、早急に単著書『日本社会におけるアメリカナイゼーションの文化史研究（仮題）』を上梓すべく、準備作業を続けている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 難波功士、若者論ウシジマくん、青少年問題、査読無、649 号、2013、pp. 14-19

② 難波功士、「上京」と若者、月刊福祉、査読無、95 巻 13 号、2012、pp. 32-35

③ 難波功士、なぜ「メディア文化研究」なのか、マス・コミュニケーション研究、査読無、78 号、2011、pp. 19-33

〔学会発表〕（計１件）

① 難波功士、「異装の考現学」、日本生活学会、2010 年 5 月 8 日、於武庫川女子大学

〔図書〕（計４件）

① 難波功士、人文書院、社会学ウシジマくん、2013、295p

② 難波功士、日本経済新聞出版社、人はなぜ〈上京〉するのか、2012、222p

③ 難波功士、人文書院、メディア論、2011、223p

④ 難波功士・高野光平編、世界思想社、テレビ・コマーシャルの考古学：昭和 30 年代のメディアと文化、2010、pp. 162-185・pp. 216-238

６．研究組織

(1)研究代表者
難波　功士（NAMBA KOJI）
関西学院大学・社会学部・教授
研究者番号：20288997